

# 多文化キャンパスでの欧米系留学生の ネットワーキング構築について

隈本・ヒーリー順子（大分大学）  
kumamoto@cc.oita-u.ac.jp

## 1. 2008年度の調査-留学生同士の交流

大分大学は、学生交流協定に基づいて海外の協定校からの留学生を短期間（1学期間、あるいは2学期間）受け入れ、英語による授業を提供する「短期留学特別プログラム」を持っているが、その英語名の International Program at Oita University の略称を使って、通常 IPOU と呼んでいる（以下 IPOU）。このプログラムに参加する学生は、主に欧米からの留学生である。アメリカからの学生は、日本語・日本研究の主専攻生あるいは副専攻生であり、留学期間は2学期間（10—11ヶ月間）の場合が多いが、ヨーロッパからの留学生の多くは、日本語未習者か、初級レベルの学生で留学期間も1学期間（4—5ヶ月間）と短い。

2008年度のインタビュー調査では、欧米系の学生は欧米系の学生同士で交流する傾向があり、主な使用言語は英語であり、アジア人学生との交流は中国人学生（香港を含む）とであったが、韓国人との交流は皆無に近かった。また、特筆すべきは、米国の留学生が韓国人学生を「排他的」だとみていたことである。韓国人学生は、留学生の宿舎である国際交流会館の最大のグループ（前期17名）であり、他の留学生とは交わらず、韓国人学生だけで行動する傾向があった。また、彼らは日本語能力は非常に高いが、英語で欧米系の学生と十分コミュニケーションできないことが問題であり、欧米系の学生も日本語で韓国人と十分にコミュニケーションできないことが交流を妨げる原因であった。しかし、2008年度10月（後期）に欧州から学生が入居してくると、数名の韓国人学生がドイツ人留学生と交流しようとしている様子が報告された。その後の韓国人へのインタビューの結果、韓国人学生は「排他的」なつもりはなく、むしろ欧米系の学生との交流を望んでいたことがわかった。

韓国人学生は、日本語上級話者であり、欧米系の学生は通常、日本語初級・中級レベルの学習者であるため、交流に必要な共通言語が欠如していることが問題である。この言語および文化障壁が米国人、韓国人学生との間に誤解や溝を生じさせることになったことは否めない。

## 2. 2008年度の調査-日本人チューターと留学生の交流

2008年度の日本人チューター15名（女10名、男5名）とのインタビューを2度にわたって行った。主な質問内容は、日本人学生から見た留学生同士の人間関係、日本人学生と留学生の人間関係についてである。以下、その簡単なまとめであるが、2度目のインタビューの詳細は、隈本・ヒーリー順子、南里（2009）を参照していただきたい。

まず、15人中全員が留学生間には言語障壁が存在すると指摘している。アジア系学生は主に日本語を、欧米系学生は英語を使用することが多いため、アジア系学生と日本人学生は英語ができないと欧米系学生と交流できないとみている。

また、日本人学生の中には日本にいながら日本語が共通言語となっていないことを指摘する者や、欧米文化の慣習に「迎合する」日本人学生に対するいらだちもうかがえる。日本語で意思伝達が困難になると安易に得意でもない英語を使い、ファーストネームで「呼び捨て」にされることも許容すると日本人学生は言う。しかし、問題は、そういいながらも実際にはそのことを留学生に伝えることはしないのである。

日本人チューターとのインタビューから日本人学生特有のコミュニケーション上の深刻な問題も浮上してきた。それは、留学生との人間関係の構築を主導できない日本人学生が存在することである。つまり、留学生とのコミュニケーションに受け身で望み、日本人チューター同士の人間関係も留学生をとおして構築する傾向がある。「日本人学生は本音を言いたくても言えない。しかし、留学生が代わって言ってくれ

る。」「チューター同士では会話が續かないときがあるが、留学生と一緒にいることで日本人同士の会話が成立する」という、留学生依存の日本人チューターの存在があらわになってきた。このように、外国語運用能力とは別に、日本人チューターは、重要なソーシャルスキルの一つである、コミュニケーション・スキルが欠如していることが新たに問題となってでてきた。

### 3. 2009年度調査の目的・方法

2008年度に引き続き、本研究の目的は、留学期間中には大分大学のIPOUに参加する欧米からの留学生が日本人と、そして留学生間でどのように交流しているかを研究することである。研究方法は、陳述式の5段階回答方式のアンケート調査とインタビューを用いた。アンケートは異文化、日本人、日本文化等に対する留学生の態度や意識を明らかにすることが目的で作成されたもので、アンケート調査後にフォローアップ・インタビューを行った。アンケートは、それぞれの陳述について「1 strongly agree」から「5 strongly disagree」までの中から一つ選択するものである。実際のアンケートの内容は、『第21回日本語連絡会議論文集』の隈本・ヒーリー順子(2009)の付録を参照していただきたい。

本稿は、紙面の都合で留学生の視点からみた交流についてのみ考察する。

### 4. アンケート結果

2009年度前期の時点での被験者は、欧米からのIPOU留学生23名(米国11名、欧州9名、豪州3名)で、本学での滞在歴は10ヶ月が15人で、4ヶ月が8人であった。日本語能力についていえば、初級レベル3名、上級レベル1名を除いて残り19名は中級レベルである。

すべての学生は、全体の質問に対して概ね日本語、日本文化、日本社会に対して前向きな態度、意識を持っていることが確認された。ただ、2名の米国人の学生については、他の留学生とは少々異なる反応が観察されたが、これについては次節に譲る。

まず、ここで指摘しておきたいのは、2008年度と2009年度の被験者を比べると、その構成人員の点で大きな違いがあることである。2009年度前期は、米国からの留学生11名の中でアジア系学生同士が5名(ベトナム系3名、中国系1名、フィリッピン系1名)が含まれ、豪州から初めて3名の留学生がIPOUに参加したが、そのうち2名はアジア系学生(中国系マレーシア人とインドネシア人)である。

また、前年度と比べて、下記の三つの表からも分かるように国際交流会館に在住する留学生の比率もまた、大きく変化している。

表1 国際交流会館に在住する国別留学生数(2009年度前期)

国	中国本土	韓国	米国	欧州	豪州	合計
人数	6	5	11	9	3	34

以下の表2と3は、2008年度の国際交流会館に在住する留学生数を示す。

表2 国際交流会館に在住する国別留学生数(2008年度前期)

国・地域	中国本土	香港	台湾	韓国	米国	欧州	合計
人数	10	2	1	17	7	2	39

表3 国際交流会館に在住する国別留学生数(2008年度後期)

国・地域	中国本土	香港	台湾	韓国	米国	欧州	合計
人数	5	0	0	14	11	11	41

これらの表が示すように、2009年度は、欧州からの留学生数の増加と米国、豪州から7名のアジア系学生が含まれていたという点で、前年度とは異なる。本稿では特に、この状況変化が彼らのソーシャル

ネットワーキング作りに何らかの影響を与えたのかどうか。もし与えたとしたら、どのようなものなのかを探してみたい。

もう1点、2008年度との学生構成の違いでいえば、2009年度の韓国人学生の中には英語でのコミュニケーションが可能な学生も含まれているという点である。

次に、アンケートの中で大分に来てから作った新しい友人（あるいは親しい人）は、日本人か留学生かという質問には、2名を除く19名の学生が日本人と留学生両方であると回答している。また、どのようなきっかけで友人を作ったかについても、以下のように、6番を除いて2008年度と同様の回答をあげている。

1. 自分のチューター、あるいは他の留学生のチューターを通して
2. 他の留学生を通して
3. 国際交流会館等でのパーティ
4. 同じ授業を通して
5. クラブ／サークルを通して
6. 都町のレストランで（注：都町は大分市の繁華街）

1から5までの回答が示すように、彼らにとって密接な人間関係を構築する場合は、やはり大学を中心とした活動からであるが、最後6番の「都町のレストランで」というのは「学外での社会行動」をとおしてである。回答した学生2名は、日本語上級話者のアジア系米国人学生と初級レベルの欧州からの学生である。留学生と地域住民との交流は時間的に限られたものであり、親しい関係にまで発展するには、留学する時間の長さや日本語能力などが重要な鍵となってくる。しかし、2009年度の被験者の一人は、来日時には日本語の未習者であり、大分での滞在も4ヶ月あまりであった。彼は、米国人留学生とレストランオーナーと同じ趣味（サーフィン）を共有することによって学外での人間関係が広がった例である。

## 5. インタビューのまとめ

23名の留学生に40分から1時間かけてインタビューを行ったが、留学中の彼らのソーシャルネットワーク作りがどのようなものであったかを探るため、以下、五つの質問を中心に自由に語ってもらった。この節では特に、1から4までの問いを取り上げる。

1. チューターとの関係はどうか。  
チューターとの間で言語的・文化的障壁を感じたことはあるか。
2. 大学の外で学生以外との日本人の友人、あるいは親しい知り合いができたか。
3. 留学生同士の間人間関係について
4. 大分大学での日本人学生・教職員との関係について
5. 大分大学の留学に期待していたことは何か。

2008年度同様、ほとんどの学生は大分大学のチューター制度を有効であると評価し、チューターとの関係についても良好とする学生が多い。例外は、既述した2名の米国人学生は、チューター制度そのものについて評価するが、彼らのチューターとの関係については、特に友人と呼べるものではないと考えている。

ここで「留学生間のネットワーク」について、2008年度に行ったインタビューのまとめをもう一度観てみよう。

(1) 欧米系の留学生の人間関係の輪は、米国、ヨーロッパ人同士の交流が中心となって構成されていることである。

(2) アジア人学生との交流は中国人（香港を含む）とはあったが、韓国人との交流はなかったこと。交流がなかっただけでなく、米国の留学生の多くが韓国人学生は「排他的」だと思っていたことである。韓国人学生は日本語能力が高いが、英語で欧米系の学生と十分コミュニケーションできないという言語・文化障

壁があることから彼らとの溝を深くしてしまった。反面、中国人学生とは英語でコミュニケーションできるだけでなく、米国の学生にとって「中国人の考え方」は日本人と韓国人と比べて理解しやすいという。

2009年度前期に在住する留学生への調査から「留学生間のグループ作り」について、前回の調査結果とは大きく異なることがわかった。まず、前年度に観られた欧米系学生とアジア系学生という国や言語によるグループはなく、明確なグループの境界線が存在しないことである。留学生間では、それぞれいくつかの気の合う小グループが存在し、時とソーシャル活動の種類（観光、食事、買い物など）に応じて、その小グループが他の小グループと共に行動して一時的に合同グループを作るというパターンが観察された。合同グループは、その活動の目的によって小さくなったり大きくなったりして流動的に形成されるのである。このようなグループ化のパターンは、どのようにしておこったのだろうか。まず考えられるのは、国際交流会館に在住する留学生の構成が大きく変化したことが一因であろう。前年度はまず、日本語能力は高いが英語はできない韓国人学生が最大のグループであったが、今回の調査ではその韓国人学生の数が激変しているだけでなく、英語ができるIPOU学生も含まれていることである。しかし、特筆すべきは米国と豪州からの留学生の中にアジアの背景を持つ学生が7名も含まれていることと、欧州からも5名のハンガリー人学生がいることである。

ハンガリー人学生は、日本語・日本学専攻の学生であり日本語ができる点で他の欧州（北欧、ドイツ、オランダ）からの学生と異なる。反面、一般的に後者ほど英語ができない。このことと関係があるかどうか分からないが、彼らは欧米の留学生に比べ、アジア人学生（韓国人、中国人、日本人）と積極的に交流する傾向がある。また、米国と豪州からのアジア系留学生の交流範囲も自国の学生だけにとらわれず、アジア人学生との活発な交流も含まれ、その交際範囲も広いことがインタビューで明らかになってきた。前年度と異なり、このようなハンガリー人学生とアジア系学生の存在が欧米圏とアジア圏の学生交流の橋渡しの役割を担った可能性が高いといえるのではないだろうか。

また、2008年度と比べて、「留学生と日本人チューター以外の日本人学生や学外の日本人とのインターアクション」についても、今回は大きな違いが観られる。まず、学内のスポーツクラブやサークルに自ら参加を希望して日本人学生との交流を求める留学生が多くなり、しかもその活動期間も比較的長く継続していることである。留学生はクラブ内での日本人学生からも「暖かく受け入れられた」という。これは、前年度のクラブ活動などで日本人との人間関係構築には時間がかかるため早々とクラブ活動を諦めてしまったり、「クラブ活動での日本の慣習」についていけなかったりした事例と比較すると驚きである。

大学外部の日本人との交流については前述したように、日本語の初級学習者が4ヶ月という短期間の留学中に地域の日本人と友人関係を構築できたのは、彼らのリスクテイキングを恐れない性格と日本語上級話者であるアジア系米国人学生との交流があったからであろう。2008年度に指摘した「欧米の留学生の日本語能力が十分でないことが、日本人学生との交流を妨げている。また、学外の日本人との持続的な交流もあまりない。」ことは、今回でも言えることであるが、留学中に学外の日本人とも交流を希望する学生が少なくないことを考慮すると、今後、少なくとも1学年留学する学生にはもっと地域住民との交流の機会を与え、その量と質についても見直すべきであろう。

インタビューした23名の学生の中で、2名の米国人学生が自分たちのソーシャルネットワークの構築について、他の学生と全く異なる見解を示した。彼らはチューター制度をいい制度として評価しているが、彼らの個人的なチューターとの経験は否定的であり、彼らは自分たちのチューターを「友人」とはみなしていない。チューターとの間には言語・文化的障壁が存在し、友人といえる関係を構築できなかったと答えている。また、彼らには学内に友人と呼べる日本人学生もいないし、学外でも日本人との付き合いは全くなかったという。二人（M1とM2と仮に呼ぶ）は、他の学生同様、クラブに入会したが、M1は合気道クラブをすぐに退会した。その理由は、「クラブの日本人学生から暖かく受け入れられなかった。」と言う。M2はラグビークラブに6ヶ月いたが、クラブ活動をしたのはわずか2回しかなかったと言う。理由は、M1と同じ理由によるものである。

この二人に共通しているのは、おとなしい性格の持ち主であり、積極的に知らない人の輪に入っていくタイプではない。特に、M1は他学生に比べ、日本に関する知識もありコツコツとまじめに勉強するタイプである。また、二人は日本語の習得も日本社会への理解も思ったほど留学中に達成できなかったという点

で満足していないようである。人間関係においても10ヶ月間あまりの留学中にチューターだけでなく、指導教員とも特に親しい関係が築けなかったことも事実である。今となつては、これらの原因を追求することは困難だが、19名が大分大学での留学経験を高く肯定している中で、この二人の例は特異なケースとして扱ってもいいのではないだろうか。

## 6. 考察と課題

以上、今回のインタビューの結果について述べたが、ここではデータ分析に関する考察と今後の課題についてふれてみたい。

前年度も今回の調査も同様、欧米からの留学生たちの日本社会・日本文化・日本語学習に対する関心は高い。彼らは自ら進んで日本留学を希望して来日する訳であるから抗日感情を持っている訳はないが、大学としても帰国時には満足して帰れるよう、大分大学での留学経験が彼らの「期待」を裏切ることがないように、今まで様々な視点からサポート・システムの強化を図ってきた。

2008年度からの一連の研究結果も主にソフト面でのサポート・システムの強化に役立ってきている。例えば、ある特定の国から多数の留学生を宿舎に入れたという過ちから学んだことは、その後の居住者の選択に生かされるようになった。今回の調査でも留学生の出身国・地域のバランスを考慮して、参加者の多様性を維持するのが重要であることが証明された。今回の被験者は、前年度より多様な背景を持っているという点で大きく異なり、この多様性が前年度に存在した、アジアからの学生と欧米系学生という二つの大きな固定的なグループの境界線を崩す一因につながったと考える。もちろん、同じ言語・文化を共有するグループは存在するが、それは小グループでありそれぞれのグループは、時と場合により必要に応じて他のグループと一緒にするという流動的なものである。今後、この点を鑑み、新しい協定校の選択・拡大をはかり更なる多様性を推し進めていくことが重要であることも再認識されたのではないかと。

日本語の運用能力の向上には時間がかかるため1学期間の留学では日本語能力が十分向上しないし、そのことが日本人との深い交流の妨げの一因にもなっているのは既に指摘した。これにはどのような方策を講じても解決することができない問題である。しかし、対策が講じられる課題もある。2節でふれた、日本人学生が持つコミュニケーション力欠如への対策と異文化理解向上策については、日本人チューターを対象としたワークショップなどを開催することによって、日本人チューターの異文化理解を容易にし、彼らの意識も変えることは可能である。

異文化理解のワークショップは、日本人チューターだけでなく留学生にも必要である。彼らは、日本という異文化環境で生活するだけでなく、留学中に様々な文化を持つ留学生とも交流するからである。2008年度の韓国人留学生と米国人学生の異文化衝突は、双方の異文化に対する理解と意識の欠如がもたらしたものである。

横田(2006)は、日本の大学が留学生受入に躊躇する理由として日本人学生と留学生の交流が進まないことを指摘しているが、確かに日本人学生との交流を進める有効な具体策はない。しかし、近年、大分大学に短期間しか留学しない学生でもクラブ・サークル活動を希望するようになってきている状況は、無視できない。クラブ活動をとおして日本人学生との交流を進めることも一策ではないだろうか。このような課外活動は、学生が中心となっているため大学側が直接関与することはない。そのため、クラブ活動を希望する留学生は、日本人チューターや他の留学生の助けを借りて入会しているようである。

留学生教育を担当する国際教育研究センター（以下、センター）でもクラブ・サークル活動に関する情報はつかんでいないし、その実態すら把握していない。今後、クラブ活動を希望する留学生にはクラブ情報だけでなく、入会後の異文化に関する実際的なアドバイスを提供することも必要であろう。また、留学生を受け入れるクラブ・サークルにもセンターが直接働きかけることが必要であろう。単にクラブ活動の情報提供を求めるだけでなく、留学生のニーズや異文化接触に伴う問題点など、留学生の視点からの情報も提供することが重要である。それによって、日本人学生と留学生の双方の交流が少しでも円滑に行われるようになれば、留学生と日本人学生にとっても有益な交流経験になるに違いない。

今後の研究課題としては、被験者の性格、性別などとソーシャル・ネットワーキング作りに欠かせないソーシャル・スキルとの相関関係についてもふれる必要がある。そのためには現行のアンケートに手を入れ作成し直さなければならぬし、被験者の数もある一定数必要になってくる。被験者の数がある程度に達すれば、因子分析など量的分析も試みることも可能である。

以上、わずか2年の間にも留学生のソーシャルネットワークに関する調査結果も大きく変化していることが判明した。今後も引き続き、これから他のテーマへと拡大し研究を継続していく予定である。

## 参考文献

横田雅弘 (2006) 『「岐路に立つ日本の大学—全国4年生大学の国際化と留学交流に関する調査報告—日米豪の留学戦略の実態分析と中国の動向—来るべき日本の留学交流戦略の構築」文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)平成15年・16年・17年度調査 最終報告書』

隈本・ヒーリー順子、長池一美 (2006) 「大分大学短期交流プログラム (IPOU) の現状と今後の展望—大学教育の国際化推進に向けて—」『大分大学センター紀要第3号』 pp.13-22.

隈本・ヒーリー順子、長池一美 (2006) 「よりよい短プロカリキュラム構築に向けて—中規模地方大学の短プロの例を中心に—」『アジア太平洋地域における日本研究と日本語教育の変容と課題』第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム予稿:香港中文大学、pp. 90-95.

隈本・ヒーリー順子、長池一美 (2008) 「大学の国際化から見た短期留学プログラム—よりよいカリキュラム構築に向けて—」『アジア太平洋地域における日本研究 -Japanese Studies in the Asia-Pacific Region』: 香港中文大学 第24章 pp. 213-221.

Junko Kumamoto-Healey, (2009) “Interaction among International Students at Oita University and their Integration into Japanese Life: a Cross-Cultural Perspective.” *Oita University Center for International Education and Research Bulletin*. pp. 23-36.

Junko Kumamoto-Healey, (2009) “Formation of Social Networks by International Students”, *Asian and African Studies*; The University of Ljubljana. Vol. XIII, Issue 1. Pp. 51-72.

隈本・ヒーリー順子、南里敬三 (2009) 「文化環境のキャンパスにおける留学生と日本人チューターと異文化接触」『グローバル社会の日本語教育と日本文化』萬美保・村上史展編、ひつじ書房、pp. 228-249.